

数十年前に理学療法士の資格を取得し、整形外科を主とする病院に勤務しました。その病院ではスポーツ選手の外傷後のリハビリテーションに力を入れて取り組まれていましたので、必然的に私自身もスポーツリハビリテーションの道を志すようになっていました。

スポーツリハビリテーションは単に病院内の取り組みだけでは不十分です。保護者やチーム、指導者など選手を取り巻く環境の理解を得る事が必要です。私は理学療法士になりたての数カ月でリハビリを担当したスポーツ選手の為と思い、チームへ連絡しスポーツ現場へ訪問しました。そこで言われたのが「何しに来たの?」、「君に何がわかる?」「病院は休めというだけでしょ?」でした。

多少なりともこのような活動はスポーツ現場には感謝されるだろうと甘い考えがあった私には返す言葉もありませんでした。医療とスポーツ現場のとてつもない距離感を感じました。

その日から私はいろんな批判を受けつつも積極的にスポーツ現場へ足を運びました。そんな活動をしている最中は指導者だけでなく医療関係者からも多くの批判を受けましたが、その全ての批判を無視しました。坂本竜馬の言葉に「世の人は我を何とも言わば言え 我なす事は我のみぞ知る」という言葉がありますが、頭の中にあるのはこれからスポーツを楽しむ子どもたちの為の環境を作ることだけに集中しました。

数年間ただただ一人で取り組んでいましたが、人生は不思議なもので、ある日突然いろんな協力者が現れてきます。私にもそんな出会いが多く訪れました。同じ志を持った仲間や、活動を理解、協力してくれる指導者など、今でもその方々には感謝の気持ちでいっぱいになります。この人たちとの出会いがなかったら今の私は無く、どこかで力尽きていたかもしれません。

病院を退職する数年前には年間100以上のチームに訪問してスポーツ現場の指導者や保護者の方と情報交換が出来ようになっていました。また、毎日のようにいろんな指導者の方からメールや電話がなり、病院受診の問い合わせやリハビリの希望などを受けていました。そんな必要とされる日々に充実し、満足した毎日を送っていましたが、一向に減らない問い合わせにある事に気付きました。

“怪我をしてからではなく、怪我をする前に予防することが重要である”

実際に病院にいと怪我によって目標としていた試合に出場できず涙する選手や、手術、リハビリなど経済的負担を強いられる選手など多く経験します。それら選手の怪我は予防できたものも沢山ありました。

それから3年間ほどは離島でのボランティア活動や、県内外にこだわらずトレーニング指導やウオーミングアップ指導、研究活動など考えられる事は全て行動に移してきました。その間もいろんな方達との出会いがあり非常に有意義な時間と情報交換が出来ました。少しずつではありますが医療といった枠を超えた活動の必要性と行動に移す勇気を頂きました。

私はスポーツに関わる仕事を選んだ際に一つの目標を立てました。

「自分の子供たちがスポーツをする時には怪我に悩むことなく、満足いくまで楽しめるスポーツ環境を作る」

私の長女はもうすでにバレーボールといったスポーツを選び練習に励んでいます。残念ながら私の行動力が無かった為に目標は期限に間に合いませんでした。ただし、私は行動を止めることなく、これからスポーツを楽しむ地域の子供たちの為に私の出来る事の全てをするつもりです。

スポーツ選手に限らず病院には怪我や痛みを抱えた方しか来られません。

怪我は予防できる事を学びました。枠を超えた行動が必要になりました。だから「THANKS」を作りました。

KARADA CONDITIONING 「THANKS」の由縁はこれまでお世話になり、私の成長に力をかしていただいた全ての方への「感謝」です。

2015年4月「THANKS」代表 杉野伸治